

# AMCoR

Asahikawa Medical College Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

北海道医学雑誌 (2009.09) 84巻5号:401～402.

【教室だより】

旭川医科大学内科学講座 消化器・血液腫瘍制御内科学分野  
—消化器・血液腫瘍学の研究マインドを持ち続ける専門医の養成を目指して—

高後 裕

## 【教室だより】

- 消化器・血液腫瘍学の研究マインドを持ち続ける専門医の養成を目指して -

### 旭川医科大学内科学講座消化器・血液腫瘍制御内科学分野（第3内科）

当科は、旭川医科大学が設立された折、内科学第三講座(第3内科)として故並木正義教授が1975年に創設され、その後一貫して、わが国における消化器、消化器内視鏡学の発展に大いに寄与し、1994年に当時札幌医大内科学第四講座助教授であった高後が引き継ぎ現在に至っています。この間に、教室に所属する同門会員数は300名を超え、現在教室には約40名、関連病院には約100名の教室員、計140名の医局員がローテーションを行っています。教室では、内科学一般の知識と技量をもとにした消化器、血液腫瘍内科学に関する高度の専門性を持った医師、医学研究者を養成し、将来の医学・医療に貢献する人材を育成することを目指しています。その良き伝統とDNAは確実に引き継がれ、母校を卒業して教室で学んだ人材がその業績を認められ、本学総合診療部、北海道大学大学院生命科学院へ教授として、本学腫瘍センター長(病院教授)、兵庫医科大学へ准教授として赴任するなど、新設医科大学の内科学教室としては全国に誇れる人材養成能力を示しています。また、当科の基礎部門の寄付講座として消化管再生・修復医学講座を保有していることなど、極めて幅広い臨床・教育システムを持っていることが特徴です。また、関連病院とは常時人事面での密接な交流を行い、教育施設として、旭川市、札幌市をはじめ、道内の基幹中心都市での医療に当科出身のスタッフが指導者、および医師として従事し、そのレベルの高さは、多くの施設から好評です。また、ハーバード大学、シカゴ大学、カリフォルニア大学など米国の一流大学への常時研究留学と共同研究が行われています。地域医療に関しても遠軽厚生病院、中標津町立病院、士別市立病院など地域になくてはならない幅広い医療を支えています。

教室の診療・研究グループは基本的に臓器別に分かれ、各グループが横断的に協力し合う体制になっています。消化器領域では、消化管グループ、肝臓グループ、および胆膵グループがあり、血液腫瘍領域では、腫瘍・移植グループと一般血液グループがあります。具体的な診療手技としては、消化管全般における各種内視鏡検査・消化管X線検査・各種画像診断法のほか、カプセル内視鏡を使用した各種小腸疾患の新規診断法、炎症性腸疾患( IBD )に対する特殊光内視鏡や小腸内視鏡を駆使した診断や白血球除去療法および抗 TNF $\alpha$ 抗体による専門的・先進的治療、粘膜切除術( EMR )や粘膜下層剥離術( ESD )による消化管腫瘍の内視鏡治療、胆膵腫瘍の正確な進展度診断のため胆管・膵管内超音波細径プローブ( IDUS )や経口胆道鏡検査、造影超音

波検査・高性能CT・MRIなどの最新画像診断を駆使した肝臓癌の早期発見とラジオ波・エタノール局注療法や肝動脈塞栓術などのインターベンショナル治療、血液腫瘍領域における各種抗がん化学療法や分子標的治療、造血幹細胞移植療法(自家・同種・臍帯血・ミニ移植)などがあります。研究分野は、各臓器別グループによってドライブされていますが、大まかに分けると、消化器領域では、消化管グループによる1)IBDの病態解明および新規治療法の開発、2)消化管における自然免疫機構の解明およびプロバイオテックスを用いた新規治療の開発、3)ピロリ除菌による発癌抑制効果やBarrett食道の発生に及ぼす基礎的・臨床的検討、肝臓グループによる1)慢性肝疾患における鉄代謝調節異常の病態機序解明、2)非アルコール性脂肪性肝炎(NASH)の病態進展の解明や治療法開発の研究、3)造影工コーによる肝腫瘍診断の基礎研究、胆膵グループによる1)胆膵腫瘍に対する抗腫瘍薬の耐性機構に関する基礎研究、2)腫瘍血管やがん間質を標的とした膵臓癌の新規治療法の開発、3)粘液産生膵腫瘍の予後研究などが行われています。また血液腫瘍領域の研究分野としては、一般血液グループによる1)血清中非トランスフェリン結合鉄(NTBI)の測定系開発、2)鉄代謝調節因子hepcidinの生理的機能や発現調節機構の解明と新規測定法の開発などの鉄代謝に関する研究、腫瘍・移植グループによる熱ショックタンパクを利用した新規白血病治療の研究が行われています。

これらの成果は、平成21年度時点での、競争的公的資金として、文部科学省科学研究費12件(基盤B1件、基盤C7件、若手B4件)、新エネルギー産業技術総合開発機構(NEDO)補助金1件、厚生労働省科学研究費5件、知的クラスター創成事業の資金1件など、合計19件の獲得として実を結び、教室のほぼ全教員と医員の一部も獲得するという、研究開発費としては教室開設以来の潤沢な規模となっています。英文原著論文に関しても、2008年度ではGutやGastroenterologyなどの英文誌を含めて17編の公表がなされ、当教室の活発な診療・研究活動を反映したものとなっています。また、これまでに日本鉄バイオサイエンス学会、アルコール医学生物学研究会、日本消化器がん検診学会、日本臨床環境医学会、日本がん転移学会などの国内学会と、国際バイオ鉄学会(Biolron2007)を主催しました。2011年には日本肝臓学会大会(JDDW2011)の開催が決定されています。

学部教育では、主に消化器病学、血液病学、臨床腫瘍学を担当し、大学院教育では、消化器病態学、腫瘍・血液病態学分野での基礎と臨床研究にかかわる大学院生(現在8名在籍)を指導しています。毎年4~6名の大学院博士論文がコンスタントに提出され、高後が教授に就任以来、64名の博士(医学)が誕生しています。

近年の、卒後研修制度と医療保険制度の変化を背景に、従来の大学の医局・講座制は大きな変革を迫られていますし、医学部卒業生の大学離れは続いたままのようです。しかし、このことは、大学の専門講座が目的を失ったことを意味するのではなく、むしろ、大学は、新たな視野と見識をもって、世界標準の次代の医師、医学研究者の育成を目指す機関になるべきことを意味しています。今ほど、医師の差別化が間近になって来た今日、学会標榜専門医の取得のみを目標とする

のではなく、卒業後、各人がどのようにキャリアアップして、自らの進路を開いていくかが重要になった時代はないことを教室として主張してきていますが、幸い、コンスタントに4～5名の後期研修からの教室への参加者があり、一定の理解が得られるものと思っています。

私たちの教室では、消化管、肝臓、胆膵疾患の専門医療、消化器内視鏡、消化器救急医療や、血液・移植、臨床腫瘍に関する専門医療に関する指導者が一つのユニットで連携しあいながら医療を行っており、短期間に効率的に多くのことを学ぶことができ、将来の医療人として欠く事のできない経験が得られるとともに、医育機関、医療機関での指導者、専門家としての社会の要求を満たす人材として旅立てる可能性が大きく、将来設計をする際の、大事なキャリアアップと技量を得ることができます。また、多くの先輩から指摘されているように、教室での細やかな、個々人の個性と特性にあった指導は、「3内」ならではの「全人的医療」を行いえる人間養成能力として定評を得ています。

昨今、「大学は症例が少なく、狭すぎる専門領域にこだわりすぎ、十分な研修ができない」などの意図的な批判がありました。しかし、現在の大学病院とその関連病院ネットワークは、(1)プライマリーケア、1次救急の受け入れによる初期診療研修ができること、(2)より幅広いローテーションによる専門領域の研修ができること、(3)新しい診断、治療法の開発に直接関与できること、(4)次代の医療、医学研究の指導者になれることなど、他の後期研修医療施設にくらべ多くの利点があります。また、大学を出発点とした場合の個々人の人生の選択はより自由度が高く、広いものであることは多くの先輩がそれを証明しています。医学・医療に対する貢献は、個々人の能力と教室の総合的能力の相乗作用の結果生まれるものであり、多くの皆さんがそのアドバンテージを受けることを願っています。(文責 高後 裕)